

かわさきの男女共同参画 に関するアンケート調査 概要版

令和6年3月

調査概要(1)

【調査目的】

男女共同参画にかかる市民の意識と実態の最新状況と過去5年から10年の推移を把握することで、報告書・データブック作成の基礎資料を得るとともに、本市男女共同参画推進の進捗状況をふまえた施策、センター事業に活用する。

【母集団】

令和5(2023)年12月7日時点で満18歳～79歳の市民(外国人市民含む)

【対象者】

住民基本台帳(外国人市民を含む)より抽出された3,500名

【抽出方法】

単純無作為抽出

【調査方法】

郵送による配布、返信用封筒による回収またはWeb回答(督促状郵送1回)

【調査期間】

令和6(2024)年1月10日(水)～2月9日(金)

【回収数】

有効 1,034票(29.7%)

調査不能 17票(転居のため宛先不明)

【調査内容】

「第5期 川崎市男女平等推進行動計画」(令和4～7年度)の進捗状況把握に必要となる項目、および「第6期 川崎市男女平等推進行動計画」(令和8～11年度)策定のための基礎資料となる項目、さらに前3版の調査結果から引き続き推移を把握しておく必要がある項目を中心に、次のような調査内容とした。

〈男女共同参画社会の現状や制度〉

男女の地位の平等感／女性の働きやすさとその理由／男女共同参画に関する用語や制度の認知

〈生活の状況や考え〉

パートナーとの間での家庭での子育てや家事等の分担状況／悩みや困りごと、相談先、相談しなかった理由／ワーク・ライフ・バランスの希望と現実

〈夫婦や家庭に関する考え〉

性別役割についての意識／女性が職業をもつことについての考え／男性の育児休業取得についての考え、理由／将来介護が必要になった時に希望する介護者

〈男女の人権の実態と意識〉

DVについての認知／DV相談窓口の認知／DV被害経験、相談状況、相談しなかった理由／デートDVの認知、認知経路／デートDVの被害経験／DV防止に必要なと思うもの／職場などにおいて性的な嫌がらせを受けた経験／性暴力被害相談窓口の認知

〈属性〉

年齢／居住区／同居者／職業／年収／婚姻状況／パートナーの職業／性別／意見・要望

調査概要(2)

【回答者の構成】

本調査の有効回答者の構成は以下のとおりであった。

	合計	川崎区	幸区	中原区	高津区	宮前区	多摩区	麻生区	無回答
合計	1,034	145	125	184	145	150	146	135	4
	100.0%	14.0%	12.1%	17.8%	14.0%	14.5%	14.1%	13.1%	0.4%
女性	486	55	58	84	73	77	74	64	1
	100.0%	11.3%	11.9%	17.3%	15.0%	15.8%	15.2%	13.2%	0.2%
男性	388	68	44	73	49	50	53	50	1
	100.0%	17.5%	11.3%	18.8%	12.6%	12.9%	13.7%	12.9%	0.3%
性別 無回答	160	22	23	27	23	23	19	21	2
	100.0%	13.8%	14.4%	16.9%	14.4%	14.4%	11.9%	13.1%	1.3%

※小数点以下を四捨五入しているため、各区の構成割合の合計が100%にならないことがあります。(以下同様)

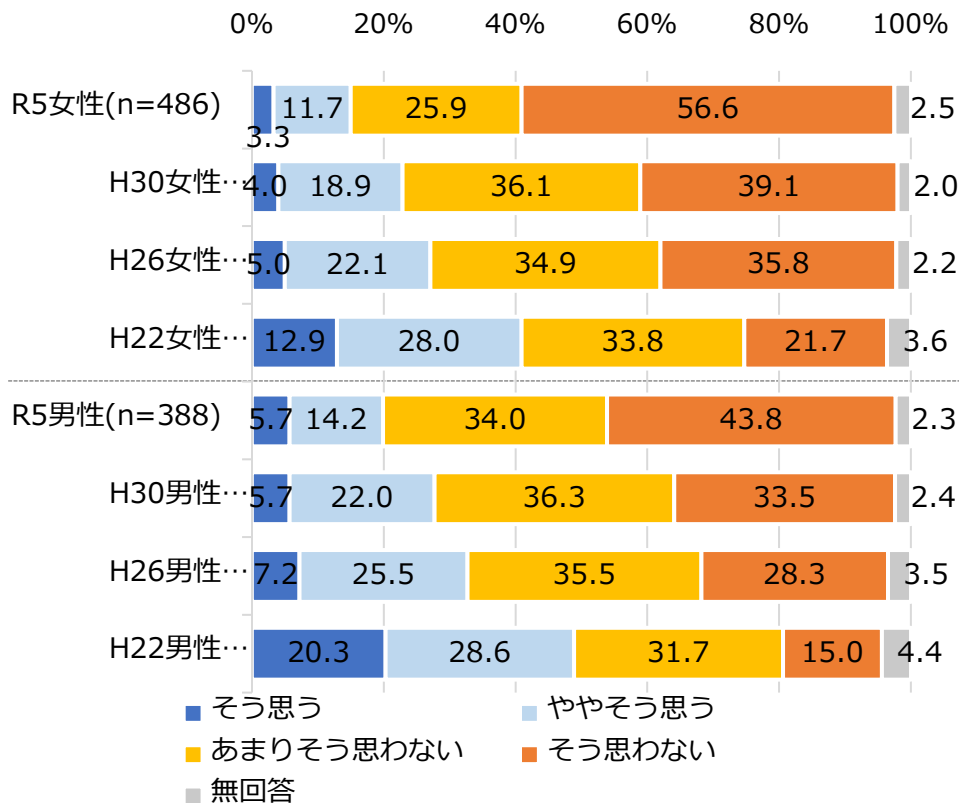
概要版を読む際の留意事項

- 本文、図表などに使われる「n」は質問に対する回答者数で、比率算出の基数を示す。
なお、回答者数がn=30に満たない場合の数値は、参考値として参照されたい。
- 百分率は、小数点以下第2位を四捨五入したため、内訳の合計が100%とならない場合がある。
- 本文、グラフそれぞれで小数点以下第2位を四捨五入しているため、割合の合計値は本文の数値を正とする。
- 「(統計的に)有意に高い/低い」との記述がある場合、信頼度95%での有意差検定を行っている。

I. 男女共同参画やジェンダー平等に係る理解(1)

市民の意識の現状—「男性は外で働き、女性は家庭を守るのが望ましい」

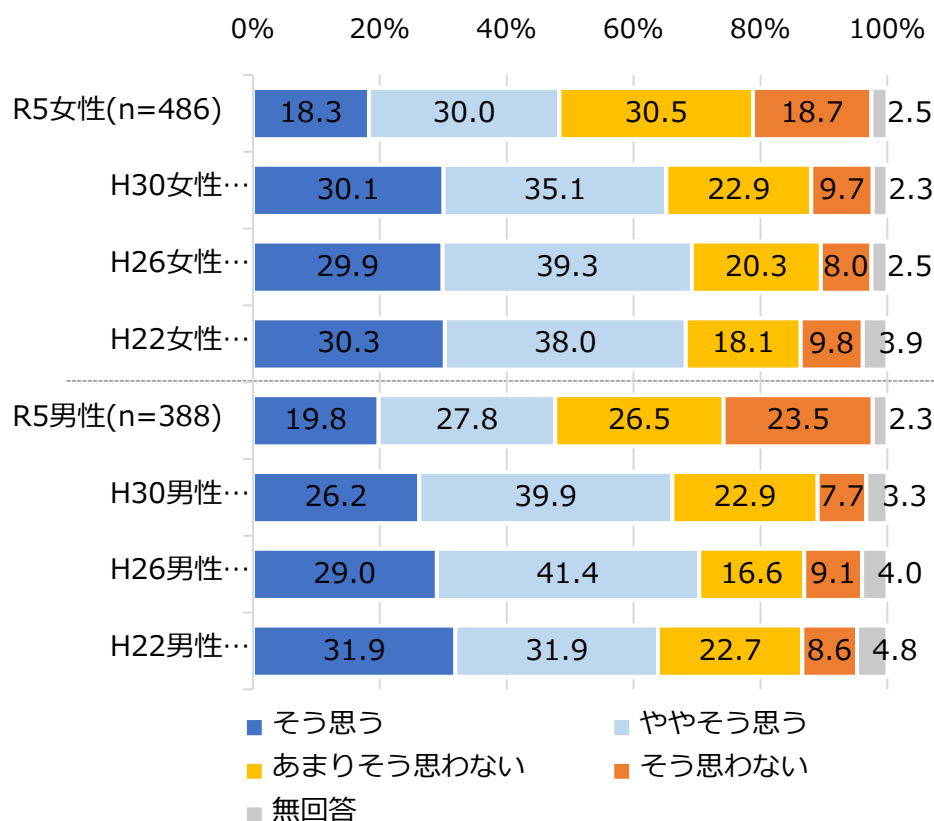
- 『男性は外で働き、女性は家庭を守るのが望ましい』について「そう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は、女性で15.0%、男性19.8%であった。
- 前回(H30)調査に比べると、「そう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は、男女ともに有意に低下した。



市民の意識の現状—「女性は、収入が少なくても、勤務時間を選べる仕事が望ましい」

- 『女性は、収入が少なくても、勤務時間を選べる仕事が望ましい』について、「そう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は、女性で48.4%、男性で47.7%であった。

※ H30までは「女性の仕事は、収入が少なくても、勤務時間を選べる仕事が望ましい」について聞いていた。

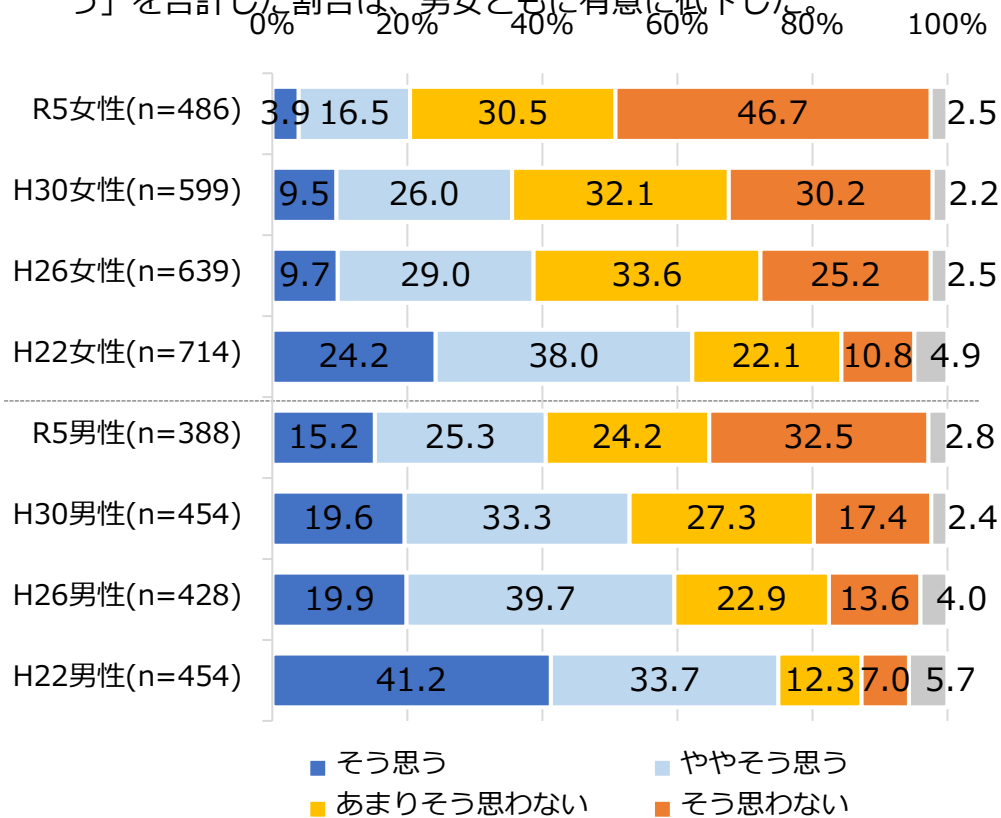


I. 男女共同参画やジェンダー平等に係る理解(2)

市民の意識の現状

一「家族を養うのは、もっぱら男性の責任である」

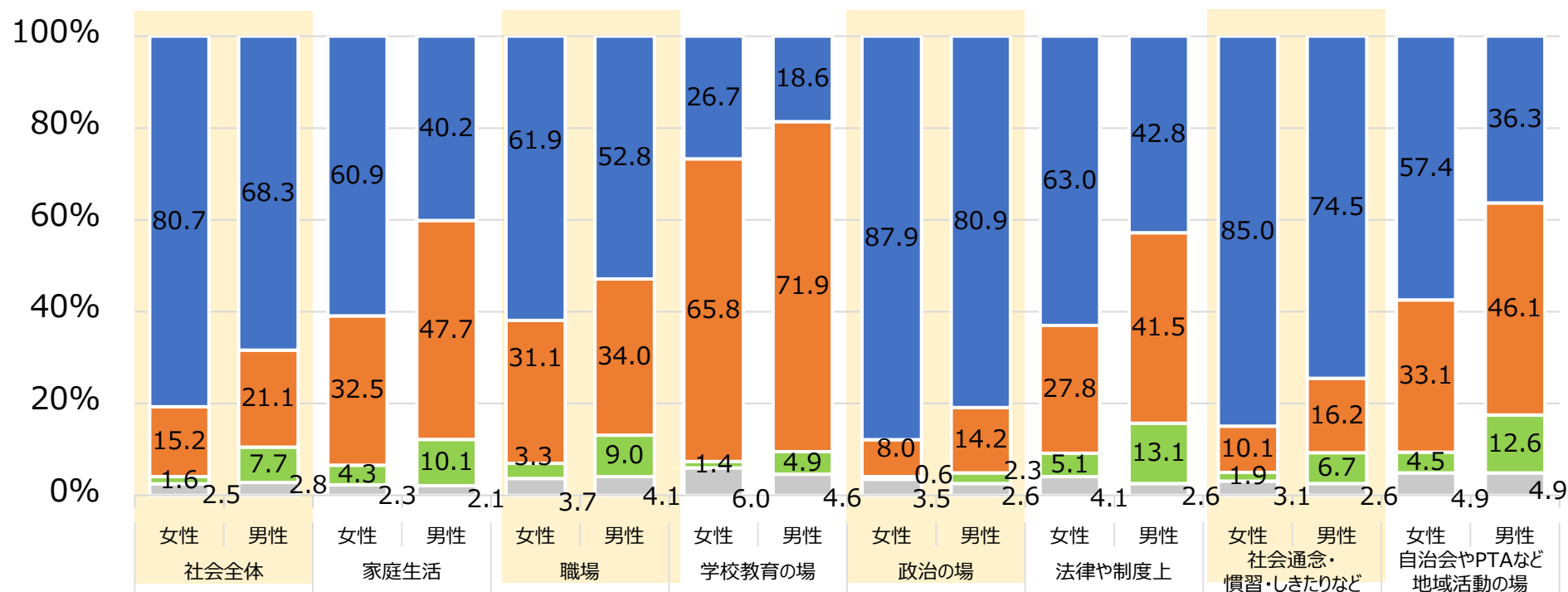
- 『家族を養うのは、もっぱら男性の責任である』について「そう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は、女性が20.4%に対して、男性では40.5%と、男性の方が有意に高かった。
- 前回(H30)調査に比べると、「そう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は、男女ともに有意に低下した。



I. 男女共同参画やジェンダー平等に係る理解(3)

男女の地位の平等感

- 男女の地位の平等感については、男女ともに、特に『政治の場』『社会通念・慣習・しきたりなど』で<男性優遇>が7~8割を超えた。
- <男性優遇>の回答割合が最も低かったのは、男女ともに『学校教育の場』であった。
- 『職場』と『学校教育の場』を除いて、男性の方が女性よりも「平等」の回答割合が有意に高かった。



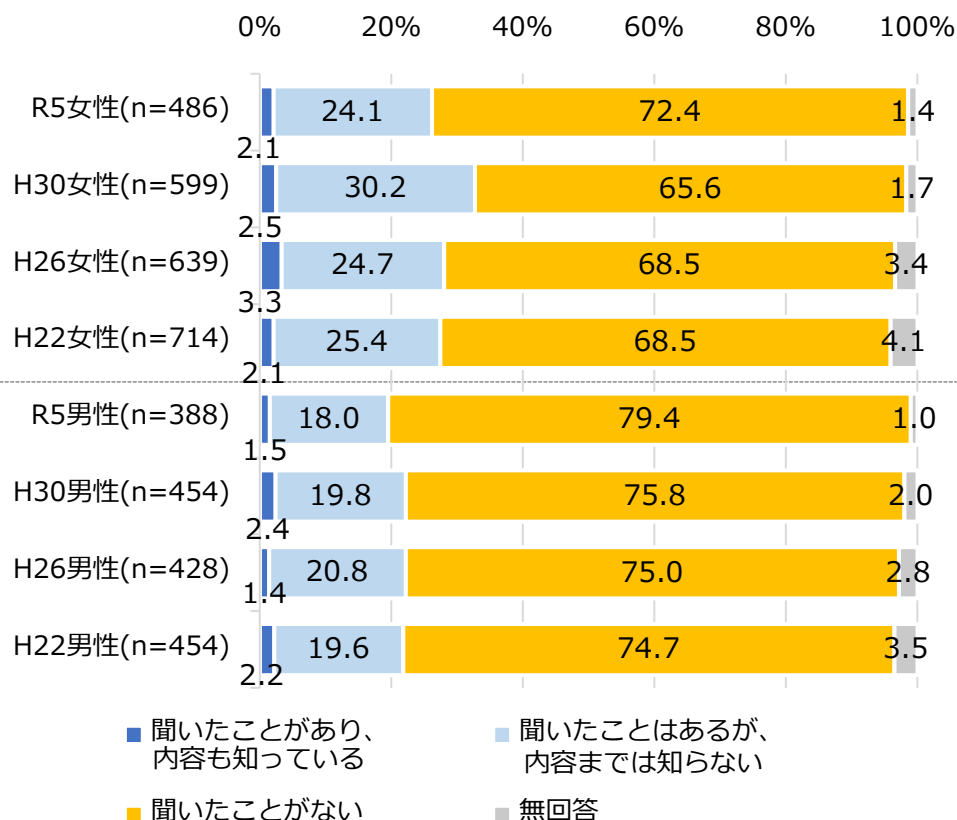
- 男性の方が優遇されている(「男性の方が非常に優遇されている」+「どちらかといえば男性の方が優遇されている」)
- 平等
- 女性の方が優遇されている(「女性性の方が非常に優遇されている」+「どちらかといえば女性の方が優遇されている」)
- 無回答

ベース：全対象者(女性：n=486、男性：n=388)

I. 男女共同参画やジェンダー平等に係る理解(4)

男女平等施策等の認知度—「男女平等かわさき条例」

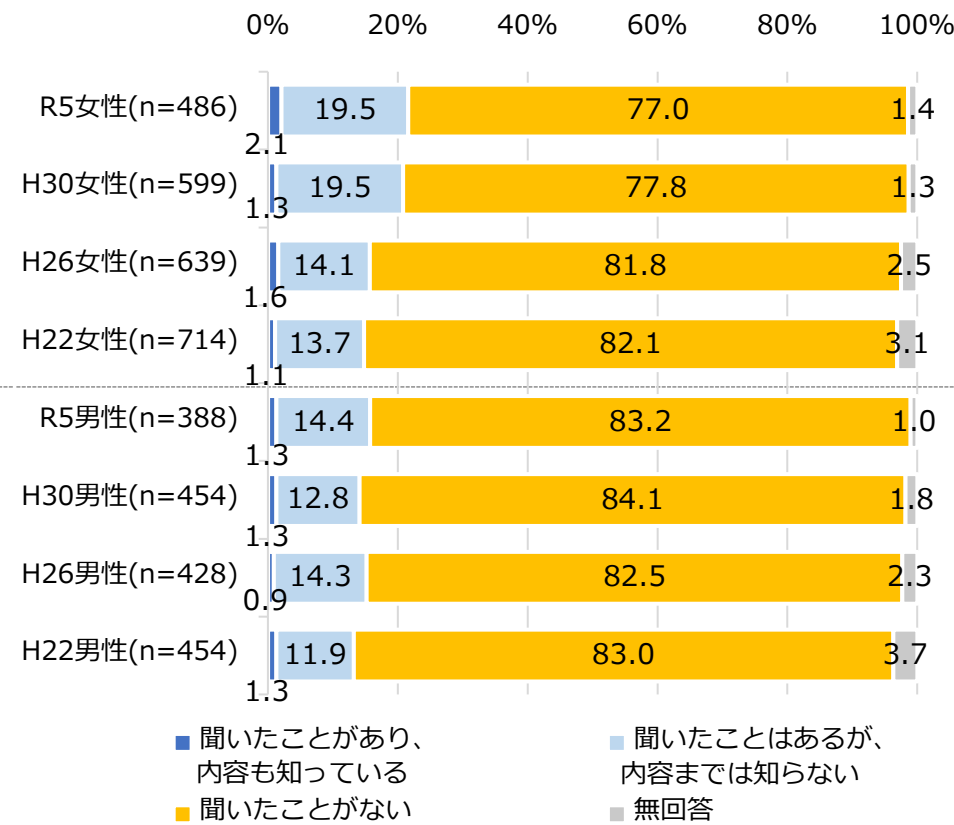
- 『男女平等かわさき条例』について「聞いたことがあり、内容も知っている」と「聞いたことはあるが、内容までは知らない」を合計した<認知度>は、女性が26.1%に対して、男性は19.6%となり、女性の方が有意に高かった。
- 前回(H30)調査に比べ、女性で<認知度>が6.6ポイント低下しており、これは統計的に有意なものであった。



男女平等施策等の認知度

—「川崎市男女平等推進行動計画」

- 『川崎市男女平等推進行動計画』の<認知度>は、女性が21.6%に対して、男性は15.7%となり、女性の方が有意に高かった。
- 前回(H30)調査に比べ、男女ともに<認知度>に有意な変化は見受けられなかった。

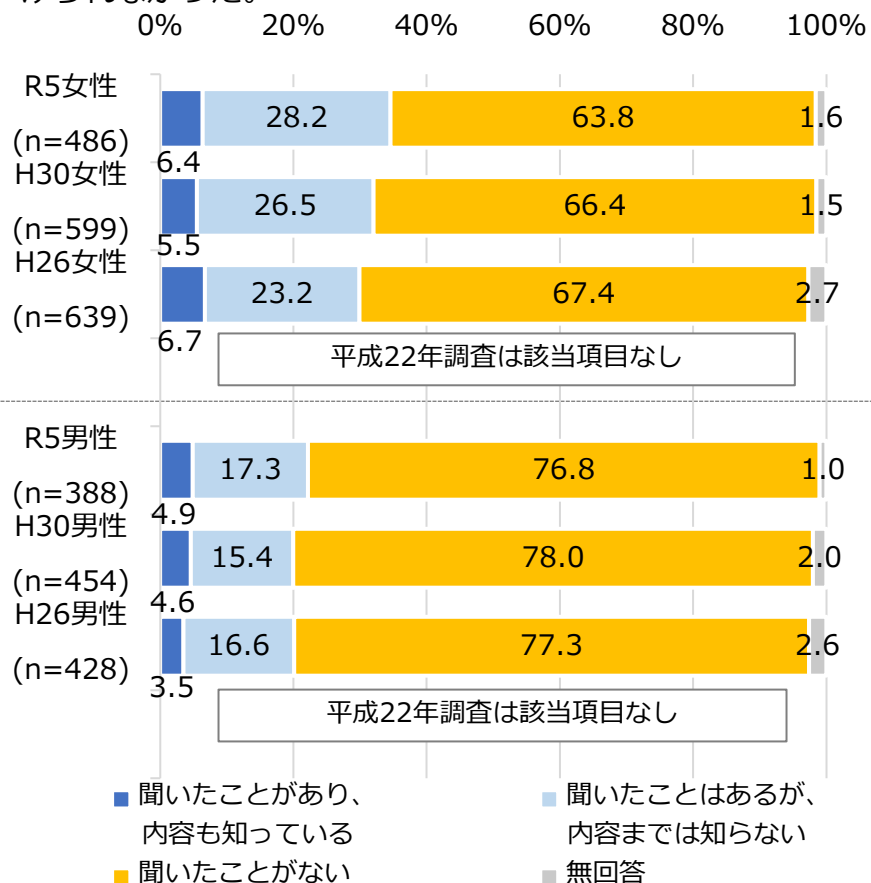


I. 男女共同参画やジェンダー平等に係る理解(5)

男女平等施策等の認知度ー

「川崎市男女共同参画センター(すくらむ21)」

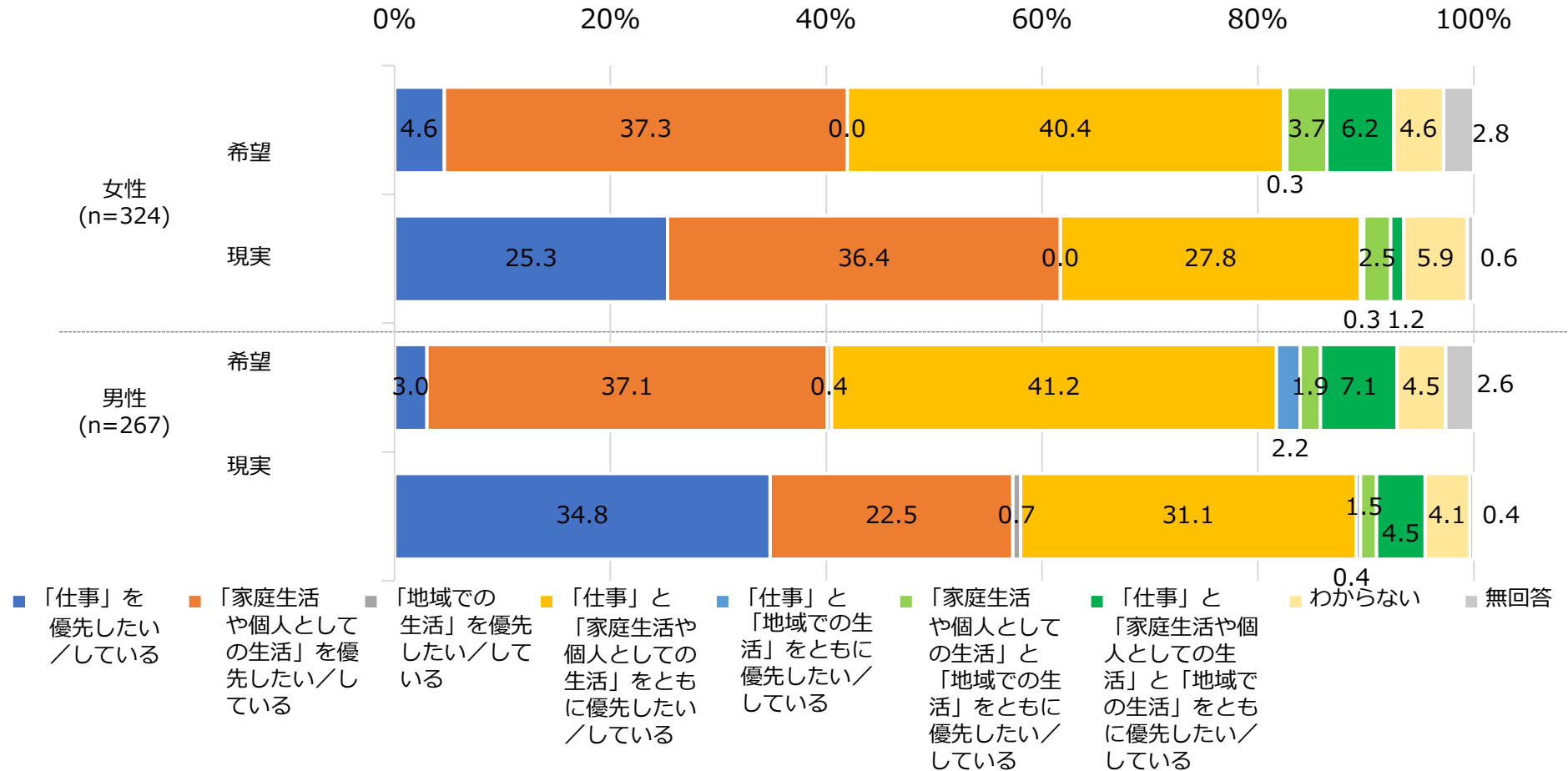
- 『川崎市男女共同参画センター(すくらむ21)』の<認知度>は、女性が34.6%に対して、男性は22.2%となり、女性の方が有意に高かった。
- 前回(H30)調査に比べ、男女ともに<認知度>に有意な変化は見受けられなかった。



II. 働く場・家庭における男女共同参画(1)

生活優先度の[希望]と[現実](18~59歳)

- 18~59歳の男女の生活優先度の[希望]と[現実]を比べると、男女ともに、現実においては「仕事」が高くなる一方で、「仕事と家庭生活や個人としての生活」が低下している。



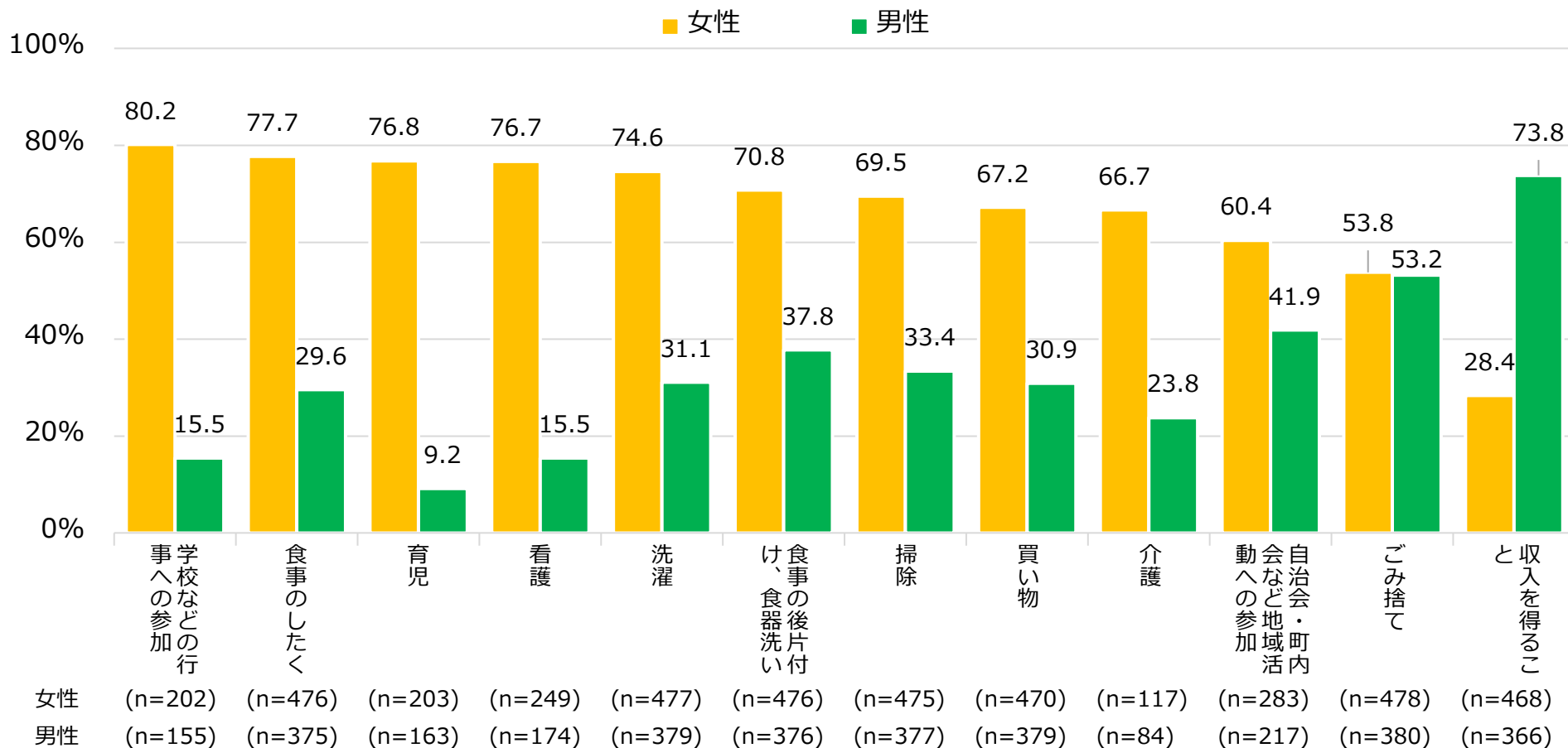
ベース：全対象者

II. 働く場・家庭における男女共同参画(2)

家庭内での分担状況：「自分が中心」サマリー

- 『家庭内での分担状況』について「主に自分が中心」と「どちらかといえば自分が中心」を合計した<自分が中心>について、特に男女差が大きかったのは「学校などの行事への参加」「育児」「看護」で、その差はいずれも60ポイントを超えた。

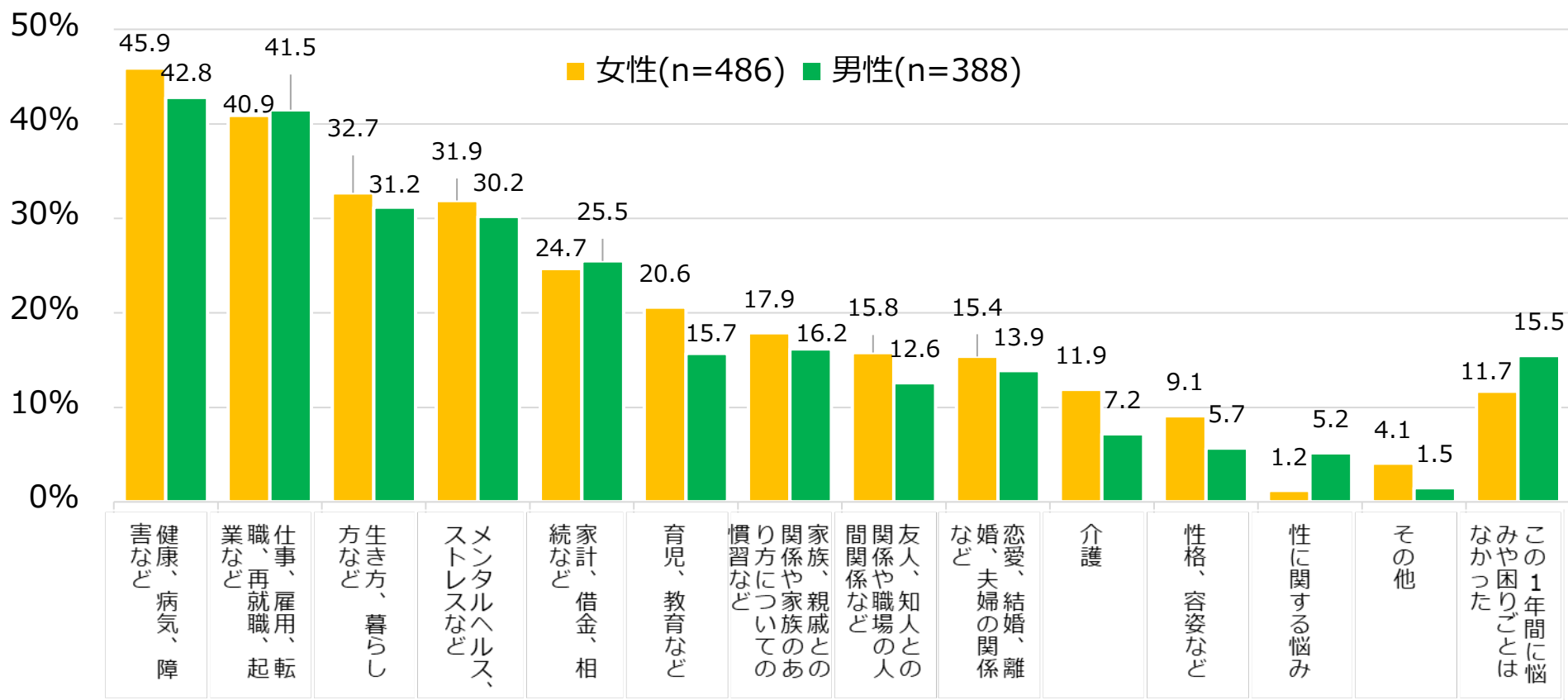
「主に自分が中心」+「どちらかといえば自分が中心」



III. この1年間の悩みごと、困りごと

この1年間の悩みごと、困りごと

- 『この1年間の悩みごと、困りごと』として多くあげられたのは、「健康、病気、障害など」「仕事、雇用、転職、再就職、起業など」で、いずれも男女ともに4割を超えた。
- 男女間で有意差が見受けられたのは「介護」と「性に関する悩み」で、「介護」については女性の方が、「性に関する悩み」については男性の方が有意に高かった。



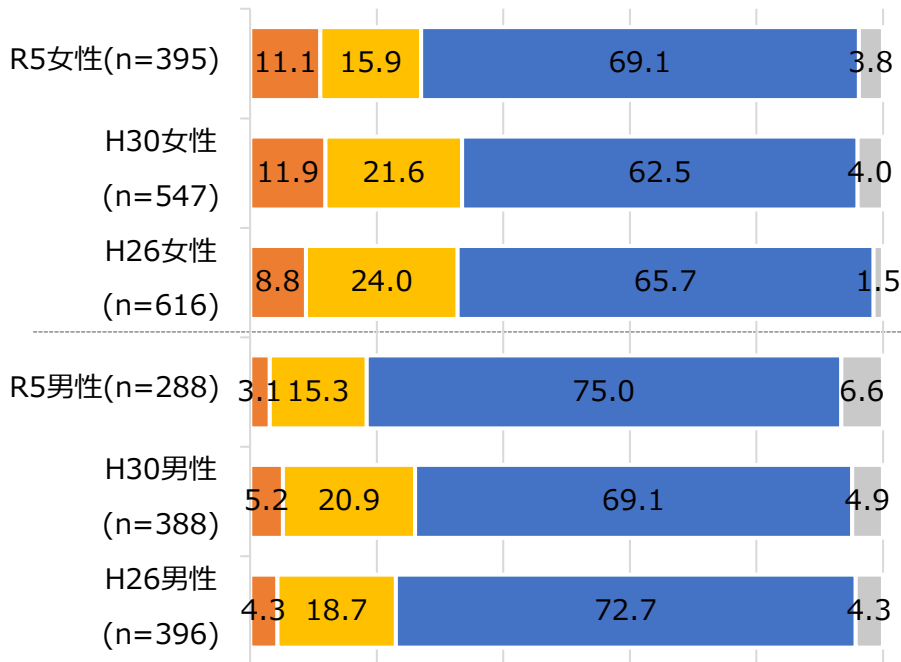
IV. DV等の被害と対策の現状(1)

配偶者・パートナーからのDV被害経験

- 『身体的暴力』『精神的暴力』『性的強要』『経済的圧迫』のいずれかを受けたことがある人の割合を<DV被害経験率>とすると、女性では27.1%、男性では18.4%であった。
- 前回(H30)調査に比べ、男女ともに<DV被害経験率>が有意に低下した。

<DV被害経験率> 「身体的暴力」「精神的暴力」「性的強要」「経済的圧迫」のいずれかを受けたことがある人（「何度もあった」+「1,2度あった」）

0% 20% 40% 60% 80% 100%



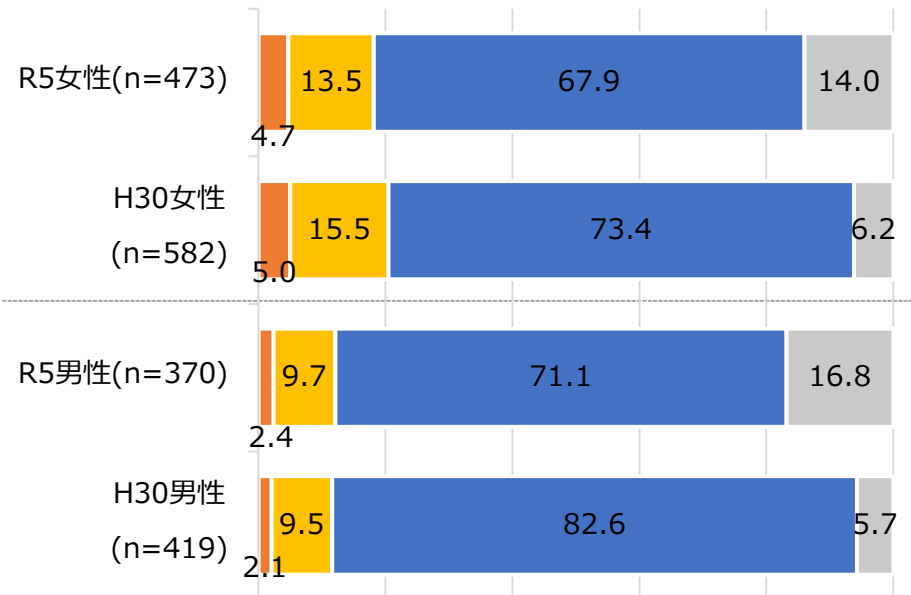
※ H26は「経済的圧迫を含んでいない」
 〇 何度もあった 〻 1, 2度あった
 〼 全くない 〻 無回答
 ベース：これまでに配偶者やパートナーがいたことがある人

交際相手からのデートDV被害経験

- 『身体的暴力』『精神的暴力』『性的強要』『経済的圧迫』のいずれかを受けたことがある人の割合を<デートDV被害経験率>とすると、女性では18.2%、男性では12.2%であった。
- 前回(H30)調査に比べ、男女ともに<デートDV被害経験率>に有意な変化は見受けられなかった。

<デートDV被害経験> 「身体的暴力」「精神的暴力」「性的強要」「経済的圧迫」のいずれかを受けたことがある人（「何度もあった」+「1,2度あった」）

0% 20% 40% 60% 80% 100%



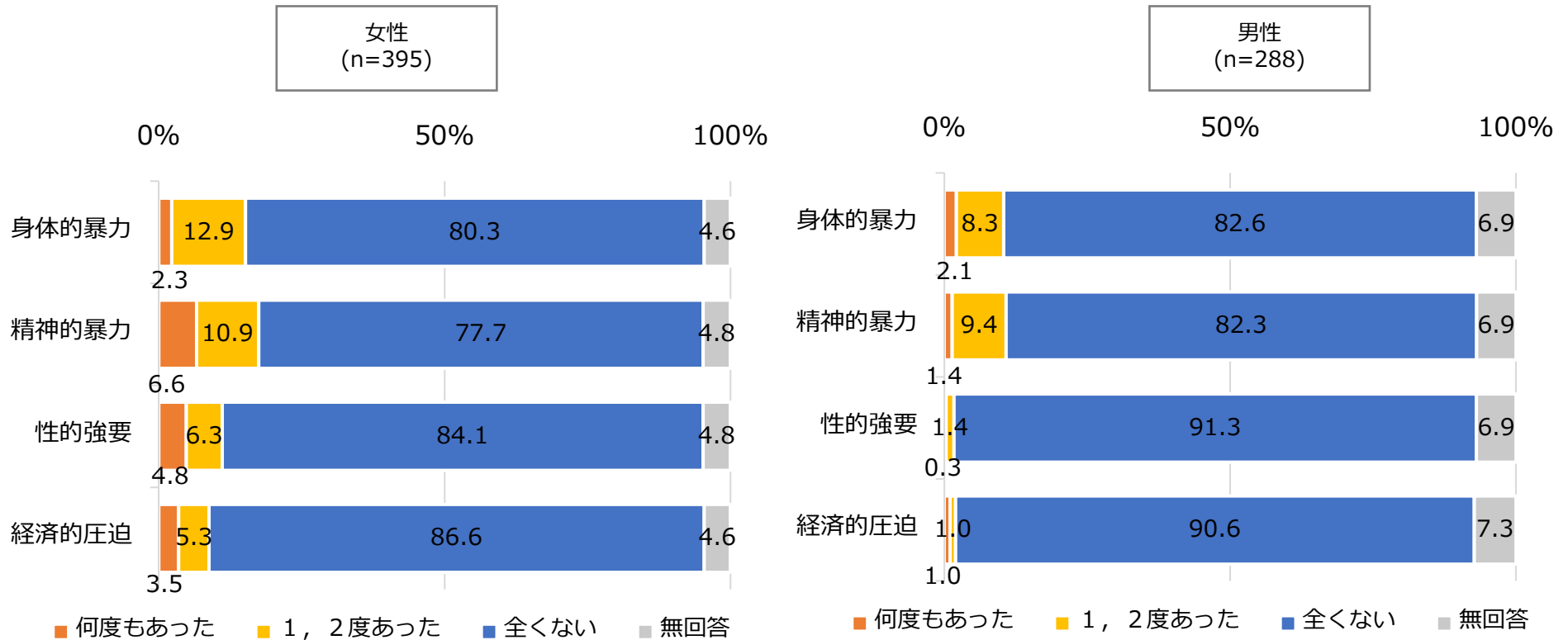
〇 何度もあった 〻 1, 2度あった
 〼 全くない 〻 無回答

ベース：これまでに交際相手がいたことがある人

IV. DV等の被害と対策の現状(2)

配偶者・パートナーから受けたDVの種類別被害経験

- <DV被害経験率>を種類別に見ると、男女ともに、『身体的暴力』と『精神的暴力』が『性的強要』や『経済的圧迫』よりも高い傾向であった。



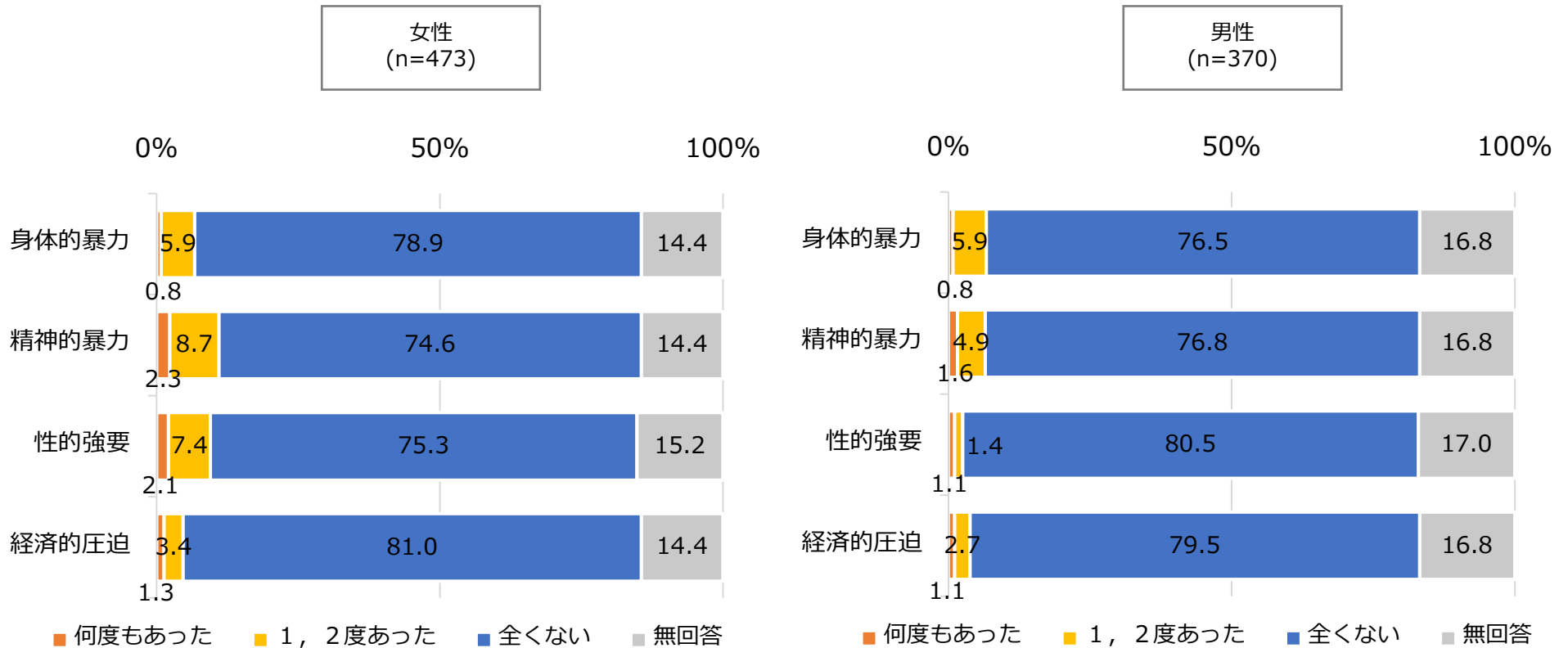
身体的暴力 「なぐったり、けったり、物を投げつけたり、突き飛ばしたりするなど身体に対する暴行を受けた」
精神的暴力 「人格を否定するような暴言や交友関係を細かく監視するなどの精神的な嫌がらせを受けた、あるいは、自分もしくは自分の家族に危害が加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫を受けた」
性的強要 「いやがっているのに性的な行為を強要された」
経済的圧迫 「生活費を渡さない、給料や貯金を勝手に使われる、外で働くことを妨害されるなどの経済的圧迫を受けた」

ベース：これまでに配偶者やパートナーがいたことがある人

IV. DV等の被害と対策の現状(3)

デートDVの種類別被害経験

- 種類別に見ると、『精神的暴力』と『性的強要』で、女性の方が男性よりも<デートDV被害経験率>が有意に高かった。



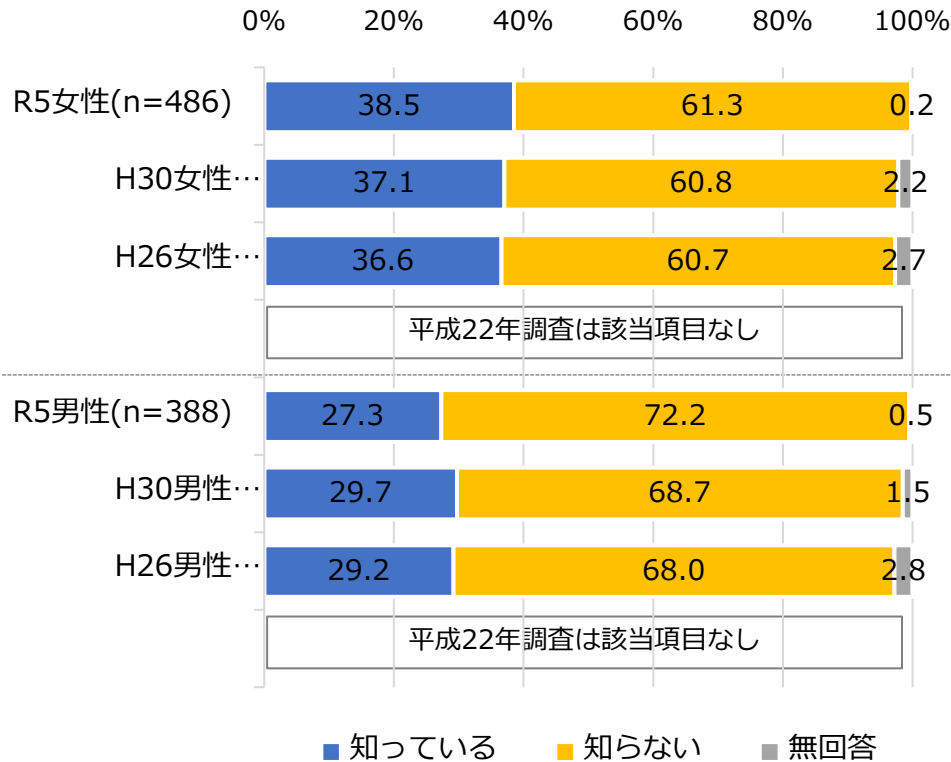
身体的暴力 「なぐったり、けったり、物を投げつけたり、突き飛ばしたりするなど身体に対する暴行を受けた」
精神的暴力 「人格を否定するような暴言や交友関係を細かく監視するなどの精神的な嫌がらせを受けた、あるいは、自分もしくは自分の家族に危害が加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫を受けた」
性的強要 「いやがっているのに性的な行為を強要された」
経済的圧迫 「給料や貯金を勝手に使われる、デート代や生活費を無理やり払わされるなどの経済的圧迫を受けた」

ベース：これまでに交際相手がいたことがある人

IV. DV等の被害と対策の現状(4)

DV相談窓口の認知

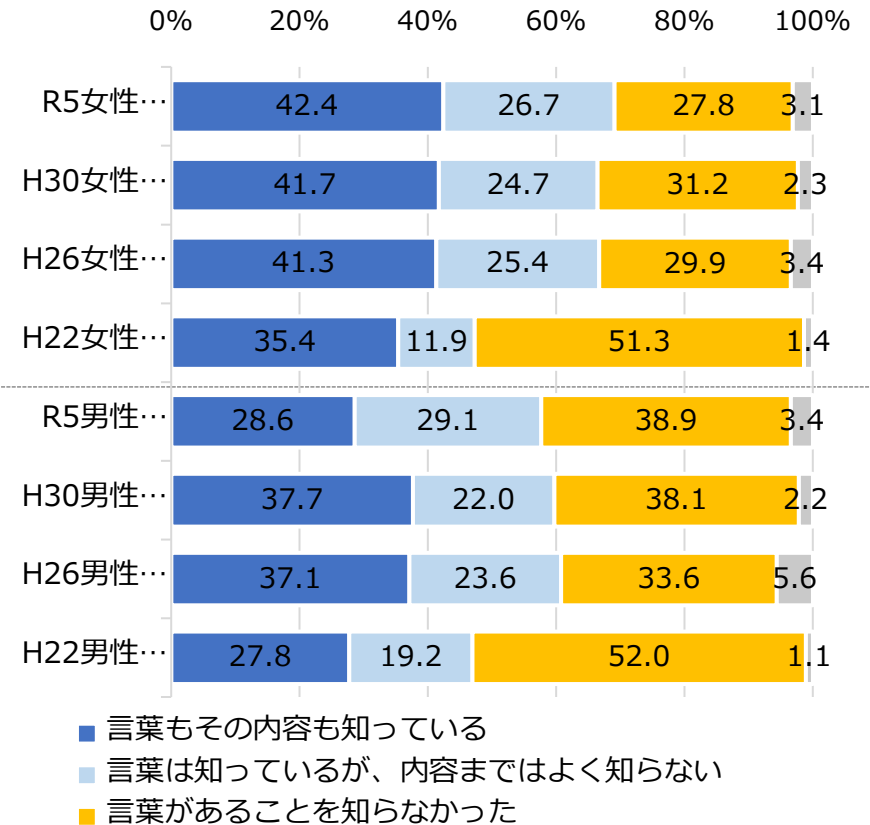
- 『DV相談窓口』の認知度(『DV相談窓口』を「知っている」割合)は、女性が38.5%に対して、男性では27.3%と、女性の方が有意に高かった。



ベース：全対象者

デートDVの認知

- 『デートDV』について「言葉もその内容も知っている」と「言葉は知っているが、内容まではよく知らない」を合計した<認知度>は、女性が69.1%に対して、男性では57.7%と、女性の方が有意に高かった。
- 前回(H30)調査に比べ、男女ともに<認知度>に有意な変化は見受けられなかった。

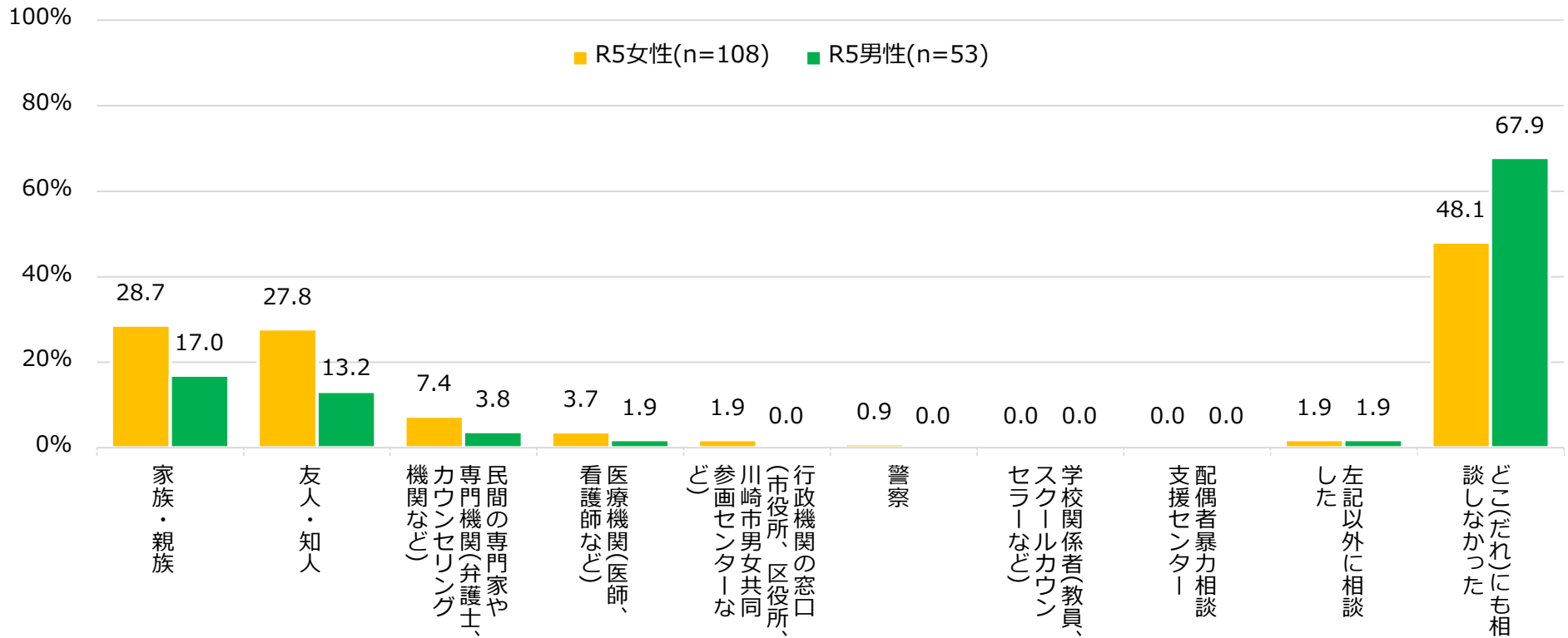


ベース：全対象者

IV. DV等の被害と対策の現状(5)

DV被害の相談先(複数回答)

- 『DV被害の相談先』を尋ねたところ、女性では「家族・親族」(28.7%)と「友人・知人」(27.8%)が主な相談先であった。一方で、「どこ(だれ)にも相談しなかった」が48.1%であった。
- 男性も女性と同様、「家族・親族」(17.0%)と「友人・知人」(13.2%)が主な相談先であった。一方で、「どこ(だれ)にも相談しなかった」が67.9%であった。

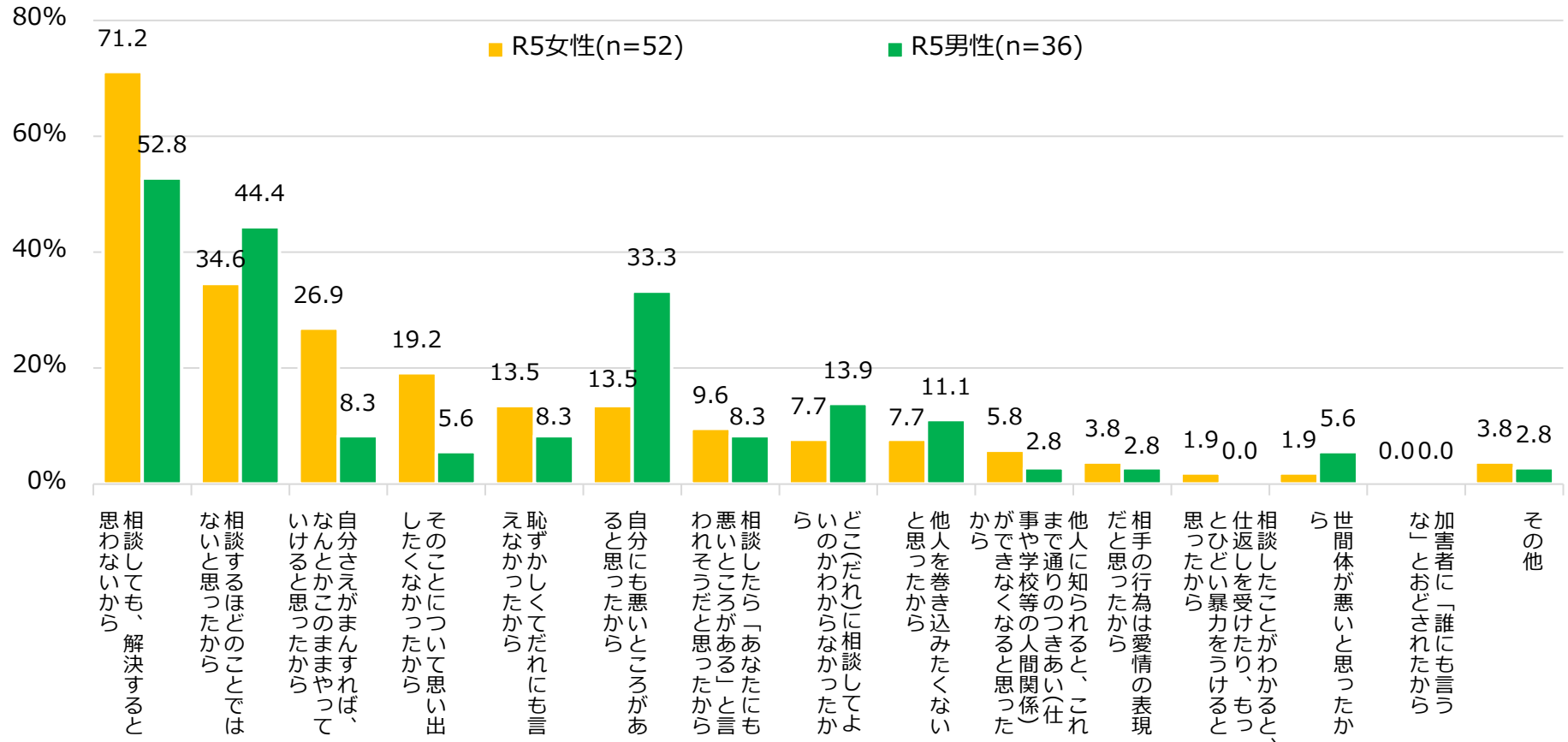


ベース：配偶者・パートナーからのDVを受けたことがある人

IV. DV等の被害と対策の現状(6)

DV被害について相談しなかった理由(複数回答)

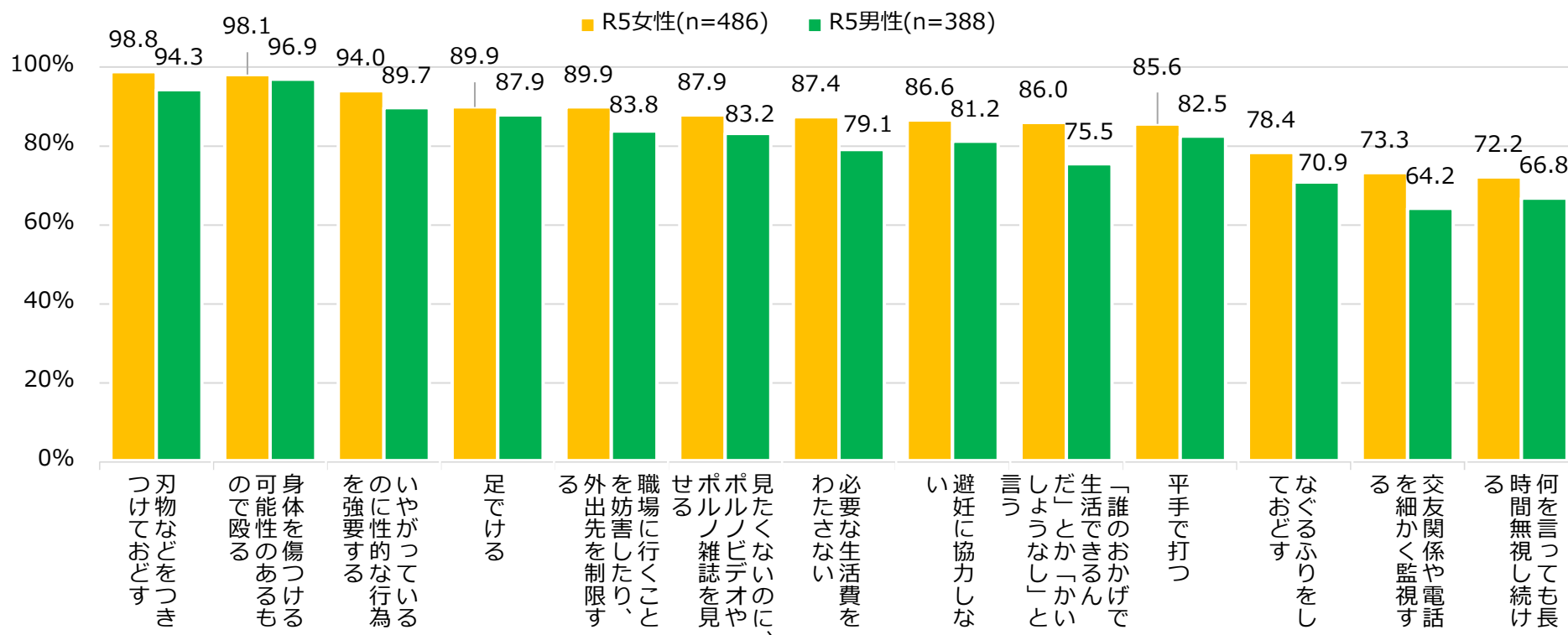
- 配偶者・パートナーから受けたDV被害について相談しなかった人に『DV被害について相談しなかった理由』を尋ねたところ、男女ともに「相談しても、解決すると思わないから」(女性：71.2%、男性：52.8%)が最も高かった。「相談するほどのことではないと思ったから」が女性34.6%、男性44.4%で2番目に高かった。
- 「自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていけると思ったから」については女性では26.9%、男性では8.3%、「自分にも悪いところがあると思ったから」については女性では13.5%、男性では33.3%であった。



IV. DV等の被害と対策の現状(7)

DVについての認識：「どんな場合でも暴力にあたると思う」

- 配偶者・パートナー間で行われた場合に『どんな場合でも暴力にあたると思う』割合は、男女ともに「刃物などをつきつけておどす」と「身体を傷つける可能性のあるもので殴る」では9割を超えた。
- 一方で、「交友関係や電話を細かく監視する」「何を言っても長時間無視し続ける」については、女性では7割前半、男性では6割台半ばであった。

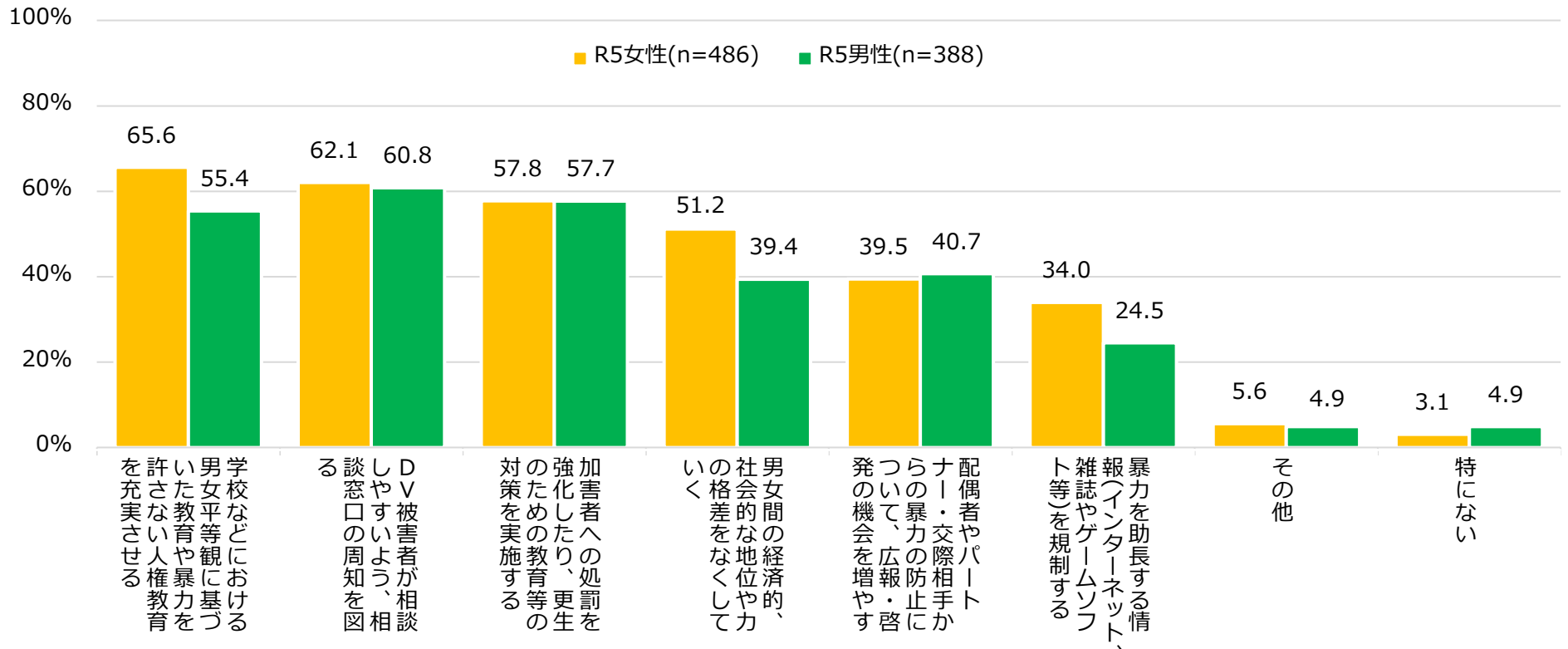


ベース：全対象者

IV. DV等の被害と対策の現状(8)

DV防止に必要なだと思うこと(複数回答)

- 『DV防止に必要なと思うこと』を尋ねたところ、女性では「学校などにおける男女平等観に基づいた教育や暴力を許さない人権教育を充実させる」(65.6%)が最も高く、男性では「DV被害者が相談しやすいよう、相談窓口の周知を図る」(60.8%)が最も高かった。
- 「男女間の経済的、社会的な地位や力の格差をなくしていく」については女性では51.2%、男性では39.4%、「暴力を助長する情報(インターネット、雑誌やゲームソフト等)を規制する」については女性では34.0%、男性では24.5%と有意な差が見られた。



ベース：全対象者